

図面と工事仕様書からみる 辰野金吾設計「安川邸西洋館」案 (1908)の室内装飾

工学研究科 産業技術デザイン専攻
建築デザイン分野 博士前期課程
2025年3月修了

有水 玲香

主査 富田 英夫 副査 小泉 隆 大庭 知子

研究背景

「安川邸西洋館」案は、「松本健次郎邸」と同様に戸畑の工業ユートピアの一環として、住宅と迎賓館を兼ねた西洋館として設計されたものの、施主の都合により実現には至らなかった西洋館である。1908年に辰野金吾によって設計された「安川邸西洋館」案を、『建築工芸叢誌』に掲載された図面と仕様書からどのような西洋館であったのか分析を行った。

研究目的

本研究の目的は、辰野金吾設計「安川邸西洋館」案(1908)について、室内装飾の視点から「安川邸西洋館」案がどのような設計案であったのかを明らかにすることである。本研究の研究方法は、建築の形態分析と文献研究を併用する。

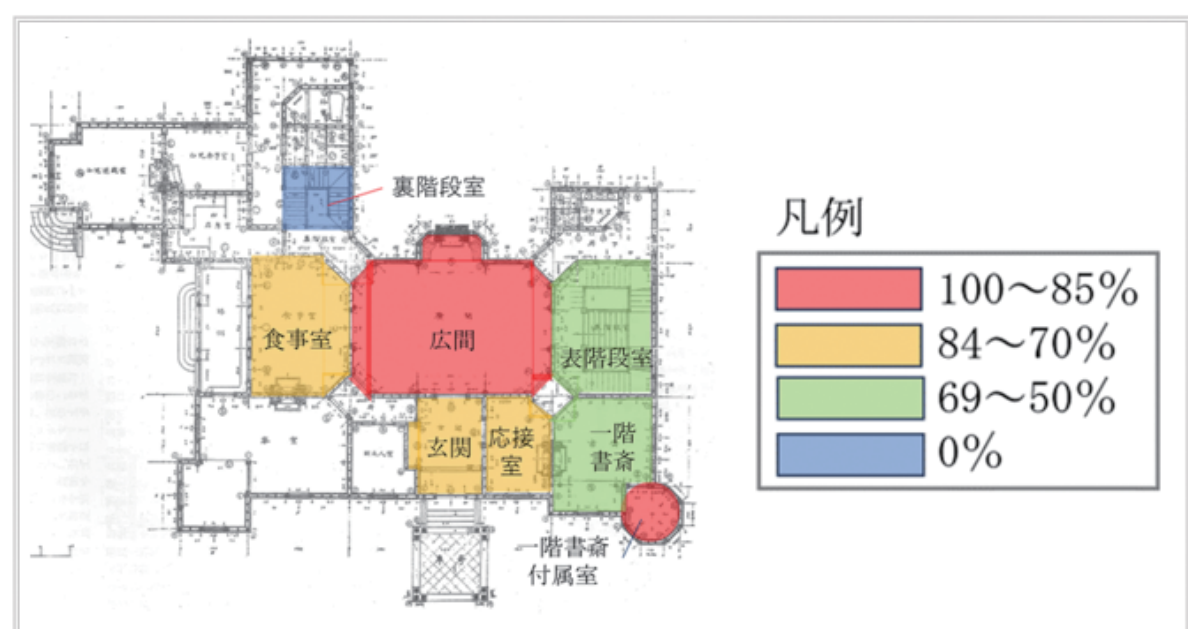
文献研究には、『建築工芸叢誌』掲載の図面と建築工事仕様書、辰野帰国後初の論文である「家屋装飾論」(1883)を使用する。

研究概要

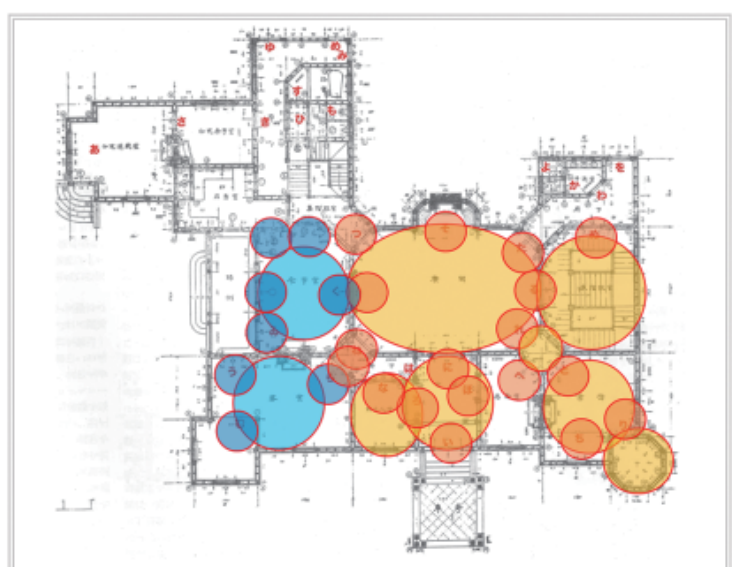
本研究は、①図面からみる室内装飾の対称軸、②工事仕様書からみる室内装飾の素材・使用箇所、③「家屋装飾論」にみる辰野の室内装飾に対する考え、④「安川邸西洋館」案(1908)と「松本健次郎邸」(1912)の比較の4点に注目して「安川邸西洋館」案の分析を行った。

①図面からみる室内装飾の対称軸

②工事仕様書からみる室内装飾の素材・使用箇所



図：一階平面図(対称軸を有する壁面の割合が高い部屋の配置)



図：一階チーク材・オーク材使用箇所

「安川邸西洋館」案の室内装飾の特徴として接客空間にも使われる中央部の部屋には壁面の対称性が強く現れ、材質としてはチーク材が使用されていることが明らかになった。

③「家屋装飾論」にみる辰野の室内装飾に対する考え

辰野が建築を設計する際に室内装飾においてどのような考えを持っていたのかに関しては、辰野の日本という国に合わせた建築を目指す姿勢が明らかになった。このような背景において、辰野は公館と私邸を区別すべき考えを持っていたとも明らかになった。

④「安川邸西洋館」(1908)と「松本健次郎邸」(1912)の比較

「安川邸西洋館」案はこの時代の西洋館の中でも、独立した大きな広間があり、古典主義的な装飾の室内装飾を基本としながらも、「松本健次郎邸」と同じ食事室にアール・ヌーヴォーの造形が見られることが特徴の西洋館であると言える。

中央に独立した大きな広間がある構成の西洋館は、同時期の私邸には見られないものの、「安川邸西洋館」案と同じ辰野葛西事務所が同時期に設計した「岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館」(1911年竣工)の構成との類似も確認できた。

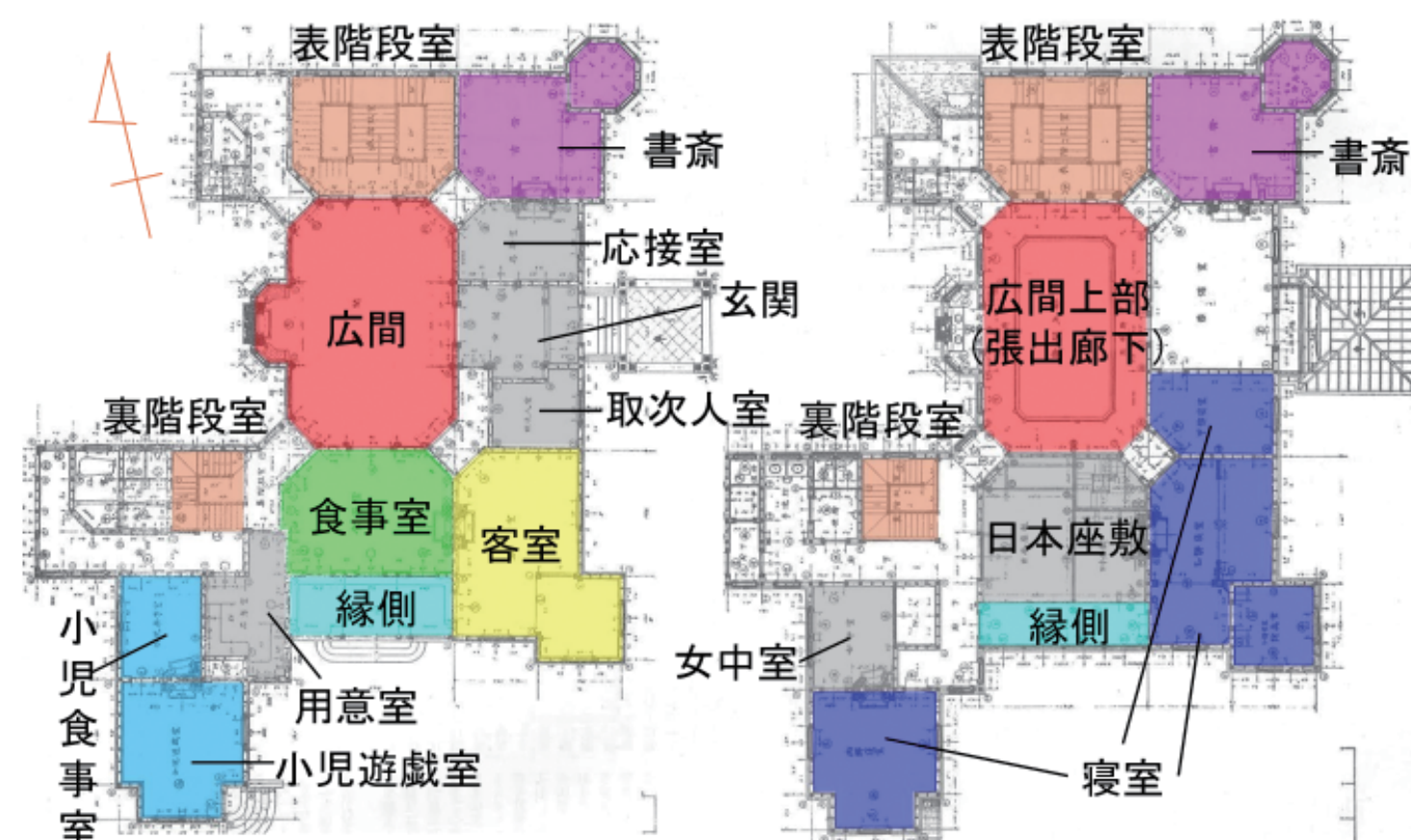


図 「安川邸西洋館」案 平面図



図 「安川邸西洋館」案 立面図(正面)

図版出典

(1)『建築工芸叢誌』【復刻版】(1912年2月～9月)、内田青蔵(監修)、柏書房、2006年。
また、(1)を基に著者が着色・加筆・レイアウトを行った。

総括

「安川邸西洋館」案は、当時の一般的な西洋館(私邸)と比較しても明らかに対称性を意識したデザインとなっており、そこには安川家が構想した戸畑の工業ユートピアの中において「安川邸西洋館」案に求められた迎賓館としての役割が影響したのではないかと考察した。

指導教員コメント

本論文は、辰野金吾設計「安川邸西洋館」案(1908)の室内装飾の特徴を図面と工事仕様書を読み解き、その特徴を当時の一般的な西洋館(私邸)と比較しても明らかに左右対称性を意識したデザインであると結論付け、安川家が構想した戸畑の工業ユートピアにおいて迎賓館としての役割が求められた事がデザインに影響したという新たな解釈を提示した。この成果は、計画案の背景から室内装飾の特徴を解釈した独自の研究成果として高く評価できる。

富田 英夫